

大友氏顕彰会だより おおとも

第48号

理事長 牧 達夫
編集 溝部幸祐



令和二年度「会費」の納入

《お願い!》

本年度(令和元年度)も、収支状況が厳しい状況ですので、できる方は三月三十一日までに来年度 令和二年度(二年四月一日～三年三月三十一日)会費を納入してください。

なお、法人会員の方には来年度会費の請求書(本年度と同額)を同封しますので、よろしくお願い致します。

定例学習会(案内)

会員学習発表の場として「定例学習会」を、毎月(5月と1月は休み)第一土曜・午後1時30分から開催しています。

会場 南蛮豊後交流館・研修室

住所 大分市顕徳町3-2-45

電話 097-578-9191

会費 300円(資料代として)

開催日時(予定)

2月8日(土曜) 13時30分～
3月7日(土曜) 13時30分～
4月4日(土曜) 13時30分～

新春の集い(案内)

役員と会員および会員相互間の親睦交流と賛同者との交流を深め、会の活動等となる推進をはかりたいと思います。次により「新春の集い」を開催しますので、ぜひともご出席のほどお願い致します。

日時 令和2年2月20日(木曜)

午後6時～午後8時

会場 アートホテル大分

会費 6000円(夕食・飲み物等)

会費は当日持参願います。

申込 申込方法・連絡先・会場略図等は、同封の「新春の集い」案内文書を参照願います。



【第7回宗麟公まつり・大友宗麟と家臣団：令和元年10月5日】

寄稿

『SORIN』観劇記

作家 櫻田 啓

いま、来日外国人に一番人気の街、東京の浅草。浅草はまた芸能文化の街でもある。そんな浅草の真ん中に「元劇」という小さな劇場がある。

この劇場で、十月十七日から二十七日までの十日間（一日休演日）にわたり、昼夜十八公演の『SORIN』が上演された。なんと、東京のど真ん中で豊後の戦国大名天友宗麟の演劇が上演されたのである。演じたのは「グループシアター」という劇団。脚本・演出は、同劇団代表の梶原涼晴氏で、氏は宗麟を演じた主演俳優でもある。

私は牧達夫理事長の紹介で、公演千秋楽の前日、十月二十六日（土曜）に家内と二人で観劇した。

劇場の「元劇」は舞台がおよそ二十畳、客席百ほどのこじんまりとした劇場であるが、舞台と観客席が近いことから、迫力がある。この日の観客席は満員で、驚いたことに観客の大半は若い人たちだった。

本稿はその観劇記である。

序幕（筆者が勝手に呼称）

開演と同時に劇場が真っ暗になり、戦国時代と思われる戦場の雄叫びと喊声・・・、太平洋戦争の開戦を伝える緊迫のラジオ放送・・・、湾岸戦争を彷彿させる砲弾の炸裂音・・・、ニューヨークの同時テロ・・・。

これでもか、これでもかと紛争や戦争の悲惨さと恐怖を、効果音とナレーションによって観客に訴える演出。

『SORIN』という時代劇とは似つかない演出だが、観客は劇のクライマックスを迎えてその意味を知ることになる。

第二幕

義鎮（五郎）とその側近の斎藤播磨守、小佐井大和守、津久見美作守、田口蔵人佐たちが登場。義鎮を囲んで酒を酌み交わしながら、酔った勢いで「君、大友の家督を継ぎなされ」などと気炎をあげる。

これに対し義鎮は「わしは家督など継ぎたくはない。沖に浮かぶあの南蛮船を見よ、わしはあの船に乗って自由に海の向こうに行きたいのじゃ」と応える。そこで義鎮の

傳役である入田親誠が「家督相続はお屋形様（義鑑）が決めること、出すぎたことを申すな」と斎藤らをなじる。これに対し斎藤らは「入田どのは塩市丸様の味方か？ ちかごろ奥方に取り入って密通との噂じゃ」と反発して双方睨み合うが、義鎮の「止めろ！」のひと言でその場は収まる。

第三幕

父義鑑登場。義鑑は斎藤ら四人を加判衆に執り立てる代わりに、大友の家督を塩市丸に譲ると宣告する。舞台は騒然となり、義鑑はその場で殺害される。「天友二階崩れの変」である。

大友家二十一代当主となった義鎮だが、大内や毛利との戦いの指揮は執らず、酒と色香に溺れて放蕩三枚の日々。

見かねた重臣の吉岡長増、臼杵鑑速、吉弘鑑理、戸次鑑連が諫言するが、「戦は嫌じゃ！ わしは平和で理想の国ムジカを造るぞ」と聞く耳持たず。

第四幕

毛利が北九州に侵攻。門司城の戦いが始まる。戸次鑑連と高橋紹運がやって来て、殿！ 指揮を執れ」と詰め寄るが「お前

たちでやれ」と、相変わらずの酒浸り。揚げ句に、戸次鑑連と高橋紹運を「わしの前から去れ！」と放逐する。

高橋紹運が「戦は人の性じゃ！」と言い放つと、義鎮は「戦のない、愛にあふれた国を造るぞ！」と叫ぶ。

義鎮は、ときどき原因不明の胸の痛みに苦しむ。そのつど神イエスにすがすが、痛みは消えない。

終 演

「耳川の合戦」が勃発する。島津軍によつて大友軍は二万余の軍勢を失う。

合戦に敗れた大友軍の武将たちは、ここに至つて初めて宗麟の描く平和な国造りの「千里眼」に気づく。そして、宗麟もまた「愛とは痛みだ」と、自分の胸の痛みが神の諭しであることを悟るのである。観客はこのクライマックスの舞台になって、序幕での効果音とナレーションの意味が「永遠の平和と愛」であると知らされる。

以上が観劇記であるが、ここに登場する義鎮（宗麟）はあくまで脚本を書き、宗麟を演じた梶原氏が描いた宗麟像である。多面性を併せ持つ、宗麟という人物の一面を

リアルに描いた作品と言えよう。

ただ、演劇を見た東京の若い人たちが、大友宗麟という人物にどのようなイメージを抱いたかは、いささか気がかりなところでもあるが……。

最後に、忙しい幕間に即席のインタビュ―にに応じていただいた梶原涼晴氏の言葉を紹介したい。

櫻田―初めての時代劇になぜ宗麟を選びましたか？

梶原―わたしは今、臼杵市の協力隊（文化・芸術部門）をやっています。そこで臼杵と関係の深い宗麟に関心を持ちました。

櫻田―脚本、演出が見事でしたが、上演するまでのご苦労は？

梶原―脚本を書くために、大友宗麟の関連本を二十冊以上読破して勉強しました。私なりの宗麟像をイメージして脚本を書き、演出に活かしました。

櫻田―NHK大河に寄せる期待は？

梶原―私はアメリカで演劇と演出の修行をしましたが、宗麟を大河ドラマにする場合は、豊後、九州、日本にとど

まらず、宗麟の夢見た関係地（例えば東南アジア、ヨーロッパ）をも取り込んだグローバルな視点が必要ではないでしょうか。それほどスケールの大きな人物ですから。

櫻田―大分の「大友氏顕彰会」に対するメッセージは？

梶原―顕彰会の牧理事長さんには大変お世話になっております。今回の東京公演にとどまらず、引き続き『SORIN』を各地で公演してまいりたいと考えております。顕彰会の皆さんとも協力し合って、大友宗麟の知名度を上げていきたいですね。



【東京浅草 丸劇】で劇団代表の

梶原涼晴ご夫妻と櫻田啓氏】

【『SORIN』主演の梶原涼晴氏】



【臼杵市公演「大友の大蔵」前で
劇団員と大友氏顕彰会の面々】



【作家「安部龍太郎・赤神 諒」氏と語る夕べ：令和元年10月5日】

大友氏と府内のまち歴史散歩①

牧 達 夫（理事長）

古地図や最近の発掘調査からみた

大友府内の町の都市計画

大友府内の町は、大友氏五代・貞親が万寿寺を建立して門前市をつくったことに始まり、十代・親世が万寿寺から北方を開発して町割りの基礎をつくり、大友館もこの頃つくられたといわれている。十二代・持直が海外貿易を始め、十八代・親治の時代大友府内の町の原形がほぼ完成したと思われる。

二〇代・義鑑、二十一代・義鎮（宗麟）二十二代・義統の時代が大友府内の町の最盛期で、現在の元町辺りから六坊・顕徳・金池・錦・長浜辺りまで、当時の町名でいうと千手堂・小物座・後小路・鋸・柳・御内・御北・西小路・上市・下市・桜・唐人・古川・長池等々府内大友館を中心に、四〇余りの町並みと多くの寺院で形成されていたようだ。

町中の道路は南北に約二キロメートルの

四つの道が走り、東西に約七百メートルのいくつかの道ができており、海岸線は現在の一九七号線の辺りだったようだ。

また、現在の塩九升商店街の通りに沿って舟入場が切れ込まれていたと思われる。

○大友氏館跡 大分市顕徳町三丁目

大友氏館跡は、平成十年（一九九八）に大規模な庭園遺構が発見され、このことがきっかけとなり、平成十三年に国史跡に設定された。

近年の発掘調査によると、大友氏館の始まりは南北朝時代（大友十代・親世の頃）にさかのぼるとされ、大友宗麟が長子の義統に家督を継がせた大友氏の最盛期に、再整備した大友氏館があったことが分かった。

最盛期の大友氏館は一辺約二〇〇メートル四方の規模に及び、外周は塀で囲まれ、館の建物は東西十五メートル以上、南北約三〇メートルの大きさを持つ中心建物跡や東西約六十七メートル、南北約三〇メートルの我が国最大級の規模といわれる庭園跡も発見されている。

大友府内の町は大友館を中心として、万寿寺など多くの寺院が建てられ、四〇余りの町に五千軒の町屋が立ち並び、宣教師や

ポルトガル人、中国人や東南アジアの人々が行き交い、武家屋敷と商家が混在する国際色豊かな貿易都市として栄えたのである。

この大友府内の町周辺からは、大友館跡のメダイや京文化の茶道具をはじめ中国・タイ・朝鮮・ベトナムなどの陶磁器・宋銭・明銭などの中国銭・分銅・地藏菩薩・懸仏・和鏡・井戸・万寿寺の鬼瓦など、こね鉢・青磁皿・土師器・漆器碗等々多くの品が出土しており、当時の大友氏や寺院・町屋の様子が垣間見える。

大友氏館の南側には御蔵場（大友氏が各地から納められた年貢米などの管理をしていた倉庫等）があり、その前方（大分川側）には、大友氏館を凌ぐ大規模な万寿寺跡があり、いずれも国指定の史跡である。

これ以降大友宗麟の保護もあり、キリスト教は次第に拡がり、一五五七年には府内に二〇〇〇人のキリシタンがいたという。教会では毎日ミサが行われ、少年合唱隊がオルガンやビオラに合わせた聖歌を歌ったり、宗教劇が演じられたことが宣教師の報告に記されている。

その後、府内には西洋医学やコレジオ（聖職者養成神学校）もでき、南蛮文化の薫り高い都市として発展したのである。

【 府 内 の ま ち 今 昔 図 】





【大友氏館の復元イメージ(大分市教育委員会より)】

大友氏館の中央付近では、大量のかわらけを廃棄した穴が複数発見され、大友氏が館で盛大に催された宴会の様子がかがえ

かわらけ(土器)は、平安時代から用いられていたが、室町時代から戦国時代になると、主君と家臣が三枚に重ねた盃で酒を飲むことで主従関係を確認し合う武家儀礼で、盛んに用いられるようになる。ところで、ザビエルと宗麟が会見したのは、この府内大友氏館であったのだろうか。

この大友氏館と庭園は大友氏を語るうえでもシンボリック存在である。南蛮B V N G O 交流館が二〇一八年秋に庭園の西側にオープンし、ヨーロッパ・中国・朝鮮半島・東南アジアに目を向けていた進取・開明の大友宗麟のイメージ映像が流れている。

(続く)



【大友氏館跡での発掘で出土したメダイ】



【大友氏顕彰フォーラム(安部龍太郎・櫻田 啓・赤神 諒:令和元年10月6日)】